

## 会 議 録

会議の名称	第 4 回那珂川市文化芸術推進審議会		
開催日時	令和 5 年 3 月 29 日(水) 10:00～12:15	開催場所	那珂川市役所 別館 2 階 会議室
出席者	<p>1. 委員 長津委員、須川委員、田北委員、簗原委員、関岡委員、鳥部委員、森委員 (欠席者)柴田委員</p> <p>2. 執行機関(事務局) 吉岡文化振興課長、藏菌文化振興課文化振興担当係長、福田文化振興課文化振興担当主任主事</p> <p>3. その他 株式会社地域計画建築研究所(コンサルタント) 2 名</p>		
配布資料	<ul style="list-style-type: none"> <li>・資料1 子どもアンケート調査結果</li> <li>・資料2 ミリカローデン来館者アンケート調査結果</li> <li>・資料3 ディスカッションペーパー (那珂川市の文化芸術振興の現状と課題)修正案</li> <li>・資料4 ワークショップ企画案</li> <li>・資料5 今後のスケジュール</li> </ul>		
公開区分	開示 ・ <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">一部開示</span> ・ 非開示 (理由:情報公開条例第 9 条第 2 号に該当)		
<p>議題及び審議の内容</p> <p>1. 第 3 回審議会の振り返り (株式会社地域計画建築研究所より説明)</p> <p>2. 調査報告 (株式会社地域計画建築研究所より説明)</p> <p style="margin-left: 20px;">(1) 子どもアンケート調査報告</p> <p style="margin-left: 20px;">(2) ミリカローデン来館者アンケート調査報告</p> <p style="margin-left: 40px;">別添説明資料 1、2 のとおり</p> <p>【質疑応答】</p> <p>[委 員]: ミリカローデン来館者にどのようにアンケートを配布したかだが、まず文化ホールで事業があった時に調査票を渡している。次に、エントランス利用者は、エントランスに調査票を置いた。生涯学習棟(研修室)の利用者、ミリカサークルの会員は、この部分の回答者が多いと思うが、これはご利用になる人の代表者に調査票を手渡ししている。そのため、回答者が多いのだと思う。</p> <p>調査結果の回答者の属性で、サークル等の主たる利用者である「60 歳代」、「70 歳代」の高齢者層が多くなっている。また、来訪頻度では「週</p>			

に1~2回程度」、「月に1~2回程度」が多くなっているが、サークルにお見えになる人の頻度が反映されているのではないか。

[委員]: 委員の意見を聞くと、研修室利用者がかなりの回答数になっていると思われる。こちらでもクロス集計をした方が良い。特に、サークル活動者は文化協会的な人だったり、比較的高齢の人だったりということが想定されるが、一般的な鑑賞事業等で来訪されている人がどういうニーズをお持ちなのかを分けて理解できるとより深まる。

[委員]: 子どもたちのアンケートについて、ピアノの鑑賞が多いが、これはどういうシチュエーションが考えられるのか。

[事務局]: あくまで想像だが、学校鑑賞の機会が多いとのことなので、音楽の授業や、年に1回の文化鑑賞事業で聞くことがあるのではないか。

[委員]: 学校の音楽の授業で鑑賞する時は、伝統的な音楽やオーケストラなど、普段、学校では聞かないものを映像や、CD等で鑑賞する。何を持ってピアノと回答しているのかは疑問である。友達の発表を聞きにいったのか、学校で誰かが弾いているのを鑑賞と捉えているのかもしれない。学校の文化芸術鑑賞だと、伝統音楽が多く、ピアニストを呼んだことはこれまでに一度もない。

[事務局]: もしかすると、合唱の伴奏を含めているかもしれない。

[委員]: ピアノを習っている子どもは多く、「発表会を見に来て」という部分かもしれない。

調査結果をみると、小中学校は学校の影響が多い。高校生は写真が多かったが、スマホを皆持っていて撮影が凄く上手である。そういうところの影響があるのだろう。

歌舞伎については、那珂川には子ども劇場があり、歌舞伎を取り入れたりする。その影響があるのではないか。

子どもたちの鑑賞等の機会が少ないとのことだが、保護者が関心を持っていない。直接話すと「そういうことがあったの?」と言われることが多い。ミリカローデンで7年間イベントをしても、関心が低いので知られておらず、子どもたちに伝わっていない。いつもイベントに参加する子どもは、保護者が関心を持っているケースが多い。子どものきっかけをつくるのは保護者だろう。

[委員]: きっかけがないというだけで、ジャンル自体を知らないこともあるだろう。このような所にもどのように取り組んでいくかは重要である。

[委員]: 学校が広めるにあたり、広報物を配って周知するが、子どもたちが明確に反応を示すのは、映画を見られること、何かもらえることだ。それ以外については、あまり反応がない。我々も宿題や学校からのプリントがあり、そこに紛れて配布するため、保護者も学校からのお知らせ等をよく見ており、カラー刷りはすべて広告くらいの印象だろう。

[委員]: 子どもたちへのアンケートの35頁で、大切にしたい理由で、個人を高める理由が大きくなっている。一方で、演劇やダンスや吹奏楽等、友人

と一緒に何かができる機会という方向で文化芸術を楽しむ子どももいるはずである。実際に子どもたちと接してみて、何か一緒につくると、個人ですること、どちらのウェイトが大きいだろうか。

[委員]: 友達同士のウェイトが大きいのではないか。学校現場では、コロナの影響で、歌わないとか、図工の絵画展が開催されないとか、そのような機会がなかった。自分でやることより、友人と取り組む方が、意欲が高まるのではないか。また、技術が高まることについて、どこまで子どもたちがわかっているのか。私は図工が専門のため、「これからはアートが大事になる」と子どもたちに伝えるが、文化芸術に接する機会等が少ないと思っている子にとっては、学校が強制的に取り組むことも必要かもしれない。

[委員]: 伝統芸能の神楽の項目について6.7%とある。那珂川市には岩戸神楽がある中で、この数値をどう見るべきか。

[事務局]: 岩戸神楽は保存会があり、小学校に地域の伝統芸能ということで毎年行かれている。学習する機会を設けられていて、先日、保存会の代表の人とお話をしたが、小学校では認知度が高くなっているのではないか。他と比べてどうなのかという点はあるが、神楽があることの認知度は高まっていると思っている。

別の会議で出た話だが、小学校7校のうち6校には行っているとのことである。

[委員]: 保存会の活動は知っていたので、もう少し高いのかなと思ったが、神楽そのものでこれだけの数値があるのは高いのかもしれない。

[事務局]: 小学校別にみると、恐らく比率が変わるだろう。岩戸神楽が地域に根付いているものなのか、子どもたちに根付いているかどうかは、今後の調査の中で見ていく部分でもあると思っている。

岩戸神楽保存会へのヒアリングでも、「まだ地域全体に根付いていないのではないか」という意見もあった。そこともリンクさせながら、今後の取組の検討になってくる。

アンケートでは過去1年間の家以外の場所での鑑賞経験と、今回のアンケートは5年生を対象としているため、先ほどの説明が一概に言えないところがある。先程の意見は訂正させてもらいたい。

[委員]: ダンスのところで「その他のダンス」が多いが、どのようなダンスなのか。おそらくは、人気アイドルグループやダンス・ボーカルグループのような親しみやすいダンスなのかなと思うが、この辺りの感触を教えてください。

[委員]: 子どもたちも、選択肢のジャンルをみてどこに当てはめて良いか分からないので「その他」にしていたり、また、TikTokでみた踊りを真似していたり、ダンスクラブでの発表の踊りなどをどこに当てはめるかわからずに、その他のダンスに入れているのだろう。

[委員]: 子どもたちは「これもした、あれもした」と細かく言っている。ジャン

ルに捉われないのではないか。

[事務局]：ダンスのジャンルは幅広い。今回の6つの項目は、ダンスを大きく分けるとオールドスタイルとニュースタイルがあり、昔からあるクラシックバレエやジャズダンスから、最近の流行りのヒップホップやチアダンス、コンテンポラリーを入れているが、全てを網羅できていない。子どもダンスのヒアリングからは、今のダンススクール自体が、ヒップホップクラスやジャズクラスだけでなく、TikTokで映えるダンスや、韓流のダンスを教えるクラスもあると聞いている。ジャンルに捉われないダンスを教えるところが増えていると聞いた。そういうところが、「その他のダンス」に反映されていると思われる。

[委員]：自治体によってはダンスでまちおこしをしているところもある。人気アイドルグループの曲が流行った時に、その曲に合わせて観光地を映しながら踊るなど、文化計画に関わるようなことが行われているので聞いてみた。

[委員]：他の地域ではあまり見ないという話で、和太鼓が多いのはなぜか。

[事務局]：高校での比率が高くなっているが、可能性としては授業で取り組んだこと、また昨年のミリカローデンの事業で有名な和太鼓演奏グループが来たため、その影響があるかもしれない。

### 3. 那珂川市の文化芸術振興の現状と課題 事務局案（修正案）（市より説明）

#### 別添説明資料3のとおり

[委員]：「知る」、「届ける」と「広げる」の違いは何か。

[事務局]：「知る」、「届ける」は文化芸術に対しての認識や知識を持ってもらったり、機会に対しての情報を得たりというところまでで、「広げる」は実際に機会を提供し、来てもらって、文化芸術の良さを知ってもらうという部分と考えている。

[委員]：別の言葉でいうと「知る」、「届ける」は広報的な話で、「広げる」は体験ということか。それが少しわかりにくい。特に「広げる」、「繋げる」では、一番大事なのは如何に体験するかである。そこが伝わらずに「広げる」、「繋げる」が、「知る」、「届ける」と同じニュアンスに聞こえてしまう。

右側は、文化芸術とそこにまつわる人材を育てるということで理解した。

[委員]：2つある。1つは、情報について「B 文化芸術に係る情報」や「D 子どもに直接情報を」とあるが、具体的な事業を見ると広報の技術支援や既存の広報媒体、タブレットを使った情報発信等が盛り込まれている。一方で、アンケート結果では、そもそも鑑賞等の機会がないとあり、先ほどの議論の中でもあったように「親の関心がないから子どもも関心がない」とか、「そもそも芸術が選択肢にない」という状況もあると考えられる。その場合に、単にイベント情報を届けるだけでなく、「芸術

とはどういうものか」や「芸術に関わっている人はどういう人か」など、那珂川市の芸術活動そのものを知っていただくような仕組みが整えられるのが最初である。もちろん、有名な和太鼓演奏グループが来ることで「カッコいい、行くぞ」と思ってくれる人はいいが、「誰？」という人の方が多いわけで、「知る」にも様々なフェーズがあり、情報については精査が必要である。

「S 推進体制の強化」について、関連事業には文化振興課のものだけとのことだが、実際には文化振興課だけではできない領域（特に社会的処方や子ども、連携・協働のところ）がある。庁内他部署との連携が記載されていないことが気になっている。市の中でも領域横断的な推進体制が必須だと思うが、その点はどう考えているか。

[事務局]：前回もご意見をいただいたが、そもそも文化芸術についてどう伝えていくかについては、「A 市民が知るきっかけづくり」ではそういった部分を意識している。「そもそも文化芸術って」や、「市内にどのような人がいるか」を知っていただくところがAの部分である。

他部署との連携について現時点の状況では、今月になるが、各部署でどのような文化芸術に関連した事業がされているか、また、各部署にどのような課題があり、そこに文化芸術を絡めたらどのようなことができるかという課題を吸い上げる調査を行ったところである。先日調査を行ったところであり、結果はまだお出しできないが、各部署の関連事業の把握や課題の抽出、文化芸術施策への意見をいただいた。今後、結果を踏まえ、部署間の推進体制を考えていきたい。この形が、例えば連絡会議になるのか、他の形になるのかは未定である。

[委員]：「学ぶ」という部分がない。そもそも文化芸術をしている人がいて、その情報を知るという構図になっていて、主な主体は市、ミリカローデン、文化協会となっているが、学校が入っていない。実際に、子どもたちは学校で文化芸術を体験している。「知る」という行動は、何かこういうイベントがあって知るのではなく、それはそもそも何なのかという「学ぶ」という行為が大事である。今は、どこかの文化芸術をしている人たちが、そのイベント情報を伝える構図になっている。そこに「学ぶ」という観点を入れていくと、委員が足りないと思っているところが、より見えてくるのではないか。「知る」の中で「学ぶ」をどのように位置づけるか。

[委員]：左から順番に項目が流れているように見えるが、子どもたちがまず最初に学んだり、体験したりして、それを家に帰って伝えていくという情報発信の方法もあるだろう。子どもたちは、自分たちが楽しかったことは家で話すし、広める。それに関連したことが、まちの取り組みや、ミリカローデンでもあっているとすれば行くだろう。学校ときっちり連携をとって取り組んだ方が、広まるのは早そうだ。

先日教育委員会とも話をしたが、先生たちも「こういうものがある」と

言われるだけでは動かないし、様々なことが国から下りてきて手が回らない。それを教育委員会が「那珂川市としてこういうことをするんです」となれば、例えば、「図工の授業として、鑑賞をカリキュラムの中で位置づけられているので充てても良い」としていただくと、教員としても楽になる。

学校はプログラミングを数年取り組んでおり、「那珂川市は ICT で先に行っている」と言ってきたが、どこの学校も取り組んでいる。文化芸術についても教育の売りとして伝えていけると、先生方の意識も変わってくるだろう。

[委員]: 教育現場がどのようなことを求められているのかなと思っていて、ただ、お忙しいのでなかなか意見を聞き出せていない。この計画ができたならば、文化施設と教育現場が一緒になって話し合いができるとうい。基本理念の大枠について、都道府県や国であれば普遍的な内容で良いと思うが、那珂川市であればもっと地域性を出した方が良いのだろうか。大阪府堺市だと千利休を打ち出していたかと思うが、例えば那珂川市だと自然が豊かであり、そういうものを入れた方が良いのか。地域性を基本理念に謳った方が良いのだろうか。

[委員]: 私自身は、子どもに関することで学校にあまり負担をかけたくない。那珂川市では地域学校協働本部が各学校で立ち上がっており、再来年度には全学校で立ち上がる。そういう所で地域性も含めて、情報を流していただくと広がっていくのではないか。

今年、歴史散策、史跡巡りをした。参加者は子ども 2 名と先生数名だったが、校区の神社を周り、地域の人に神社の謂れを学ぶことをしたところ、保護者もそういうことがあったんだ、そういう場所があったんだと知り、先生方も地域探検を授業でしていても、そういうことを知らないことが分かった。来年度は丸ノ口古墳公園に行こうと思っている。地域にも文化芸術や歴史があるので、地域学校協働本部にも情報を伝え、活動を拡げてもらうことは大事であると思う。

[委員]: 他の自治体の計画を見ていないため何とも言えないが、今、那珂川だからという視点で言えば、主な施設に那珂川らしさがあるとか、那珂川らしさが感じられないといけないというよりも、ちゃんと定着するのかがという点で、地域性や文化芸術といっても様々な文化芸術があり、それによって届け方も違うはずだけども、全てが文化芸術になっているところで、どこまで具体的に落ちてくるか。

最終的に、ここまで子どもたちの声を聞いたにも関わらず総花的に終わりそうだ。総花的より具体的になるはずではないか。先程の岩戸神楽の話もそうだ。今は理念的な話のため、そういった具体的な話が出ていないのかもしれない。

[委員]: こういう計画は総花的になりやすいが、具体的な事業を書き込むことで地域性や独自性が出てくるだろう。ここまで調査した結果を、やや拡

大解釈をしながら強みとして打ち出していくことが大事である。  
千利休の話は、文化芸術を通じた都市のブランディングとして、割と地域の外側を意識した地域性を打ち出している。一方、ここで議論しているのは、内側に向けた啓発、地域性の共有だと思っている。それをやっていくためには細かなニーズを見ていくことが重要だろう。先ほど委員がおっしゃったプログラミングが売りであれば、STEAM 教育だろう。昔は STEM 教育ということで、サイエンス（科学）・テクノロジー（技術）・エンジニアリング（工学）・マスマティックス（数学）を学ぶものだったが、そこにアートが含まれている。例えば、そういうことが考えられる。出てきたキーワードをもとに、どうすれば文化芸術の振興に繋げられるかという視点を我々も持たなくてはならない。

[委員]：案1から案2に変わったことの1つとして、子どもという枠が入ったことである。アンケートも実施し、これからのまちを担う子どもたちを据えたところは大きいだろう。先ほど、委員からもご意見があったが、「N 歴史の継承」について、歴史を誰に継承するかという話と理解している。関連事業では、ライトアップや後継者不足のための場の設定しか書かれていないが、世代を超えた連携等が重要になるだろう。子どもを中心にどのように関わられるかが重要だ。

[委員]：もう少し人によっても良いのではないか。文化芸術の敷居が高く、そもそもタッチする人が少ない中、歩み寄った方がよい。まちの中に面白い人はどこにでもいる。そういう人を紹介したり、いつの間にかそういう人と一緒にクリエイティブなことができていたりすると良い。アンケート回答者が、高齢者が多く、直ぐには状況は変わらないことを踏まえると、その人達にもう少しフォーカスして、一緒に取り組んだり、注目をして、生き生きと暮らしていることを見せることが、ここで子育てをしたり、生涯を終える時のモデルになるのではないか。那珂川で農業をされている人や商業をされている人など、まちの人の顔が見えると良い。

子どもという軸は大事だが、それを入れるなら、高齢者や子育て層も入れられるともう少し具体的にイメージが湧くと思った。

[委員]：地域性ということだが、将来像に「自然都市なかがわ」や「これからも住み続けたい」とあり、地域性は出てくると思うが、子どもたちに聞くと、「水がきれい」、「カワセミがいる」、「ミリカがある」、「総合ディスカウントストアがある」ということだ。これまで低学年や中学年の授業で浄水場を見に行ったり、川のことを勉強したりしたことが大きく影響している。将来像を描くなら、地域の文化芸術に関わる人にもっと触れるようなことも重要になるだろう。そうすると、子どもたちからも那珂川の良さについて深い所が出てくると思う。

[委員]：主体の顔が見えないという話について、市・ミリカローデン・文化協会以外の主体の活動、事業も肉付けされていくのか。

[事務局]: その通りである。ただし、その範囲について市役所内の他部署までなのか、関連する団体まで広げるかまでは決まっていない。

[委員]: 文化芸術が「繋げる」という所について、基本理念に「みんなで創る」とあるが、みんな感が感じられない。市役所が主導するところで、それ以外は育てるという感じになっている。関係資本をつくるのが文化の役割であり、ただ発信してそれを受け止める人が参加するということではなく、みんなで育むことで、その関係性で文化が作られる。そういう視点が必要である。

子どもということであれば、子どもの権利として、まずは子どもが意見を表明することが重要である。子どもに限らず、広報機会を広めること、情報を知らせるだけでなく、聞くことが重要であり、市民の声を聞くことが、学ぶことにも繋がる。その辺りを感じられると良い。

主語がわからないところがある。特に関連事業で、例えば子どもの所で「エントランス利用者へのアプローチの検討」とあるが、知っている人からすればミリカローデンのエントランスだと思う。市がするのか、ミリカローデンがするのか。全体的に主語を明らかにした方がよい。

[事務局]: 元々は主体を記載していたが、市とミリカローデンしか取り組んでいない形になってしまったため、削除した。今、資料として出している部分は、市であったり、ミリカローデンであったりでしか想定できていない。様々な主体の方が展開していく形に肉付けしていかないといけない。

[委員]: 別に隠さなくて良かった。ここは議論する場なので「足りないね」ということを確認すれば良い。

推進主体を地域団体やヒアリングされた団体、学校などにした時、一方でこれは行政計画で10年計画であり、市の事業として予算措置をしていくもの。その時に、1つ1つを委託として取り組むのか、民間で独自で取り組んだことを把握するのか。評価ともセットの話である。市が主体ではない取組をどこまで記載すべきか。行政の中でも考え方が分かれるところではある。私はできれば色々な主体が入ったほうが良いと思っている。

[事務局]: 最終的なまとめ方の話である。計画の進捗に関しては、審議会の設置条例の中で審議会の委員がみていく形になっている。計画の中にどのような形で関係団体等の合意形成を得ながら位置づけていくか。勝手に入れて、評価することは出来ない。事務局で丁寧に進めていきたい。

[委員]: 法律ではないし、義務規定でもない。書かれたことを全部しなければいけないという計画でもないが、丁寧なプロセスで様々な団体との協働のあり方を明記していくことは大切だと思う。

[委員]: 白丸が現状で、黒丸が今後ということなので、そこをしっかりと区別することである。既存に関しては既にやっつけらっしゃる人がいるので、そ



の主語を明確にする。今後に関しては、固有名というよりも、民間団体という言い方になるかもしれない。既存の活動している団体が、資源、資本になるので、そこをしっかりと盛り込むことだと思う。

#### 4. その他

##### (1) ワークショップについて (株式会社地域計画建築研究所より説明)

###### 別添説明資料4のとおり

[委員]: 中学生以下はどこまで含めるのか。

[事務局]: プログラム内容によるが、イメージとしては幼稚園児までは参加できる想定で、赤ちゃんまでは考えていない。

[委員]: 1日で1つをするということか。

[事務局]: 予算との相談だが、複数ジャンルを選べるようにしたい。ただし、回数は1回、1日のみである。

[委員]: 3つある。1つは、目的の中に「文化芸術に触れる機会のなかった人を対象」とあるが、この人々を巻き込む方法はどのように考えているのか。もう1つは、ミリカローデンでする良さは何なのか。そして、こうした事業をした場合の参加者数はどれくらいなのか。

[事務局]: 広報面について、企画案では「広報なかがわ」のスケジュールを示しているが、それと合わせて学校の協力を仰げればと想定していた。まだ直接話をしていないが、チラシを学校で配布していただくということである。

ミリカローデンでする理由は、今後の拠点となるため、そこに対して親しみを持ってもらいたいため、第一候補としてあげている。

[委員]: 定員制になるため、募集された人数が集まってくる、関心のある人がやってくるイメージだろう。

これまで機会がなかった人を対象にすることを軸足にするとのことだが、ミリカローデンのアンケートでも「防災フェアが良かった」という声があった。3月に開催して防災を学ぶフェアをすると親子連れがたくさん来られた。秋には西鉄バスのイベントもある。これも親子がたくさん来られる。親子イベントに行ってみると、そこで何か芸術に触れることができたというものがあると良いのではないか。

[委員]: 理解が追いついていない。そもそも何のためにやるのか。これをして意味があるのか。目的としては、文化芸術推進計画を作っていく中で、これまで文化芸術に関わりがなかった市民が触れるための機会を作ろうとするときに、コンサルタントがこれから那珂川市で文化芸術を担っていくのか。こういう案が出てきても判断しようがない。例えば、このような主旨とするならば、那珂川市に住んでいる人が考える企画にするとか、ミリカローデンが拠点になるならこのような機会を作って考えていくならば分かるが、この企画の良し悪しを考えて、これをしたときに何が残るのか。まだ、この計画をつくる中で市民の声を聞いたら分かるが、

これから那珂川市として、まさに市民の人たちと一緒にこのような機会を作っていく際の最初のきっかけとなる事業について、どう企画するかは非常に重要だ。どういう人が誰に対してという文化芸術、アートの企画をする。それをその主旨で集まっていないメンバーで話し合うこと自体がよくわからない。もったいないというか、消化試合だ。

[事務局]: 事業について、どういう方向性、企画でやったらよいかを計画を作った後に考え出すのではなく、計画を作る前に先行的にやってみて、もう少し精度を高めて計画に盛り込むことが出来ればという位置づけだと思っている。委員のご指摘は、「それをコンサルタントが企画して意味があるのか」という話であると理解している。計画に盛り込むという意味では、意味があると思うが、良い方向に行けば今後はミリカローデンさんがするとか、市民の皆さんがやるはずのものになるのに、コンサルタントが企画し、そこに誰も巻き込んでいないことについては、コンサルタントは判断しかねるところである。

方向性としては、何らかの形で市民の皆さんが入ってもらったワークショップをしていきたいという話が残っていたこともあり、今からやっていく意味としては、市民の皆さんからアイデアを募るようなワークショップをするよりも、皆さんの中で関心が高そうな文化芸術に関わりにくい人々に向けどのような企画を考えたらよいか、そのための企画として出させてもらった。今後を見据えた場合にどうしたら良かったかについては、そこまで考えが至っていなかった。

[委員]: 企画を盛り込むということは、具体的にはどういうことか。例えば、ミリカローデンを舞台にここで出た案に市民が参加して、それを計画に盛り込むというのはどういうことか。

[事務局]: 通常計画の中に大きな方向性と、例えば、こんな事業をやっていくというイメージを書いたり、実際に今後事業をしていく場合は事業名を明記したりする。少なくとも私に関わる、あるいは知っている範囲において、自治体で明確に文化芸術に関心が低い方に対して企画・事業をやっていくということを位置づけている所は聞いたことがない。本当に書き込んだ際に、どういう事業をしたらよいか分からない状態で動き始めることになると思う。その時に、計画を作る支援者として先行的にやってみて検証してもよいのではないかということで、ご提案した。

[委員]: やってみて何を検証するのか。

[事務局]: このような事業が、例えば、参加する前にあまり関心がなかった人が、面白いと言ってきて今後参加してみたいとの声が挙がったというようなことである。

[委員]: 例えばミリカローデンが主体となってそういうことを企画したら、今後、ミリカローデンでする時の参考になると思う。そうではない主体がした場合に、これをやって何が残るのか。

[事務局]: 計画を推進する上での予算措置を含めて、関心がなかった人へのきつ

かけづくりといったアプローチの仕方についてはノウハウがなく、どのようなアプローチをしていくと、文化芸術に関心を持ってくれたり、当事者意識を持ってくれたりするのかが、イメージができないところがある。ただ、予算を取っていく上では事業の説明をしていかなければならない中で、ワークショップを次年度できる機会があり、コンサルタントと話をする中で自治体のゆくゆくの事業のモデルケースではないが、1回やってみてその効果があるのであれば、それに関連した予算、事業を組んでいく。主体者は市ではないかもしれないが、そういうものの参考になればと思っていたところである。

[委員]: 行政はあまり企画しない。例えば、南畑の美術散歩も、アートに関心が無かった人に向けて、もっと地域に根付いた作家さんに接してもらおうということで取り組んできた事業であり、最初は参加者も少なかったが、大きく成長してきたモデル事業だ。関心のない人に関心ある主体にしていった先進事例である。実際に那珂川でやってきたことである。美術散歩という地域の中の色々な作家さんをネットワークさせるような企画においても、今まで関心のない人に関心を持たせるような企画である。それをワークショップという便利な短期間で集約させようとしているところも分からない。そういう大事なものを企画しようとする時に、これから主体となり得ない文化振興課がキュレーションしようとしているのも分からない。計画を作ろうとしている人たちがそれを考えるのもよく分からない。それが本当に根付いていくのか、実質的に計画に盛り込まれるのかも分からないまま、少し形式的な感じである。本当に、文化芸術の体験のものとして企画するのであれば、こういうアプローチではない。計画自体の意見を聞くようなワークショップであれば、この場で意見を言うべきだと思う。ワークショップが多義的なので意見を聞くというのであればまだしも、こういう企画をするならば、もっと違うことをしないと、本当に那珂川市に根付く大きなチャンスなのに非常にもったいない。3番目にするならば、もっと違うことが出来るはずである。

[委員]: 私もこれを見た時に、これがどのように計画につながっていくのだろうと思った。絶対に単発で終わってしまう。興味・関心を持ってもらうためには一発ものでは駄目で、コツコツと取り組まないといけない。

[委員]: ワークショップの目的は、アンケートやヒアリングでは聞けない人の声を聞いて、アンケートの補足にするものと思った。

来年度にミリカローデンでアートマネジメントの人材育成の講座を実施する。普段来ない人に向けたワークショップを、参加者と一緒に企画を検討し、実践する。それを9月末までにする。実際にするが、そのような話であれば分かる。ミリカローデンが抱える課題を解決するための試行的な実践であるが、様々な人、講師に来てもらい、那珂川の人が主体となって取り組むものだ。

一発物で取り組むなら、駅前のナカイチで取り組んだほうが良い。ミリカローデンで取り組むハードルが高いということが散々言われているのに、ミリカローデンでわざわざする意味が分からないし、筋が通っていない。

ワークショップは意見交換を行う場にした方が良い。なお、この内容で取り組む場合は、関心の高いジャンル・内容にする必要性もないため、関心の低い演劇でも良い。

[委員]：ワークショップの方向性については当初からご意見があったが、改めて、検討していただきたい。

## (2) 今後の進め方について (株式会社地域計画建築研究所より説明)

別添説明資料5のとおり

[委員]：ある市では、パブコメ時にワークショップを開催したことがある。

[会長]：以上をもって第4回那珂川市文化芸術推進審議会を閉会する。